



歴世女装考

春



76
3070
1



岩瀬百樹翁撰

歴世女粧衣考

三書房合梓發兌



歴世女粧衣考序

明治三十七年九月十七日



明治三十七年九月十七日

わが友山東庵のあるるにむう一系は侍従
はたまたま比まの書讀りな好く今八十歳
より申す侍従の書と名を以て目と冊子とに
世の中よりいひて唐母を以て女中と云ふ源
くかう唐の女中と云ふ名を以て唐の女中と云ふ
るをあるるに唐の女中と云ふ名を以て唐の女中と云ふ
ありて唐の女中と云ふ名を以て唐の女中と云ふ

女粧考 卷一

此の書は終の事を見却上代の素撰りの中傳
 なる事と云ふ事今此稿嘉永の事なりと云ふ事
 程もさしと云ふ事ありての事むすむ事
 牙の如く編撰かきも来りてむすむ事
 と云ふ事海を遊ばしむ板りてありて我が家
 法に傳母の人より見たりと云ふ事ありて
 小志と云ふ事ありての事其よりと云ふ事あり
 り傳りてありての事其よりと云ふ事ありて

此の事ありての事其よりと云ふ事ありて
 小志と云ふ事ありての事其よりと云ふ事あり
 たりありてありての事其よりと云ふ事ありて

弘化四年丁未三月 菅原祐之

考といふ書名を儲けの文政五年ありける。今より廿三年、斯てのちの事、
 閑あつた書、茂操の女、装ふ係る、変あまは必撮抄、成假の女装考、
 料抄と名付、物今既、廿五卷、ふむびぬ。半紙十一行、然れども、年々、
 草子の作を、書肆等、ふ乞き、随て編され、随て需め、督促、他の操筆、
 古稀のう、九つを、重算、ぬき、かく、骨も、料枝と、俱、朽る、
 かの、とら、あたま、し、の、抛棄、あたま、此書を、綴る、ふい、蓋、の、企、
 始、七八百年、許の中、昔を、限り、と、あ、と、太古の、女装、ふも、追、
 書名、よ、歴世の、二字、を加ふ。
 ○吾が、寡陋の、積置たる、料材、を、書と、為、い、考証の、引、
 あ、と、と、俄、よ、と、か、の、昏を、搜索、んと、する、ふ、寒家、書、よ、と、

藏、も、三度の、類、火、過半、じ、あ、ひ、ゆ、藏、ざる、書、の、学、友、又、備、ある、ひ、
 西土の、書の、稀、ある、物、の、轉、借、して、返、す、た、期、ふ、迫、る、燈、下、小、披、て、鶏、を、
 ろ、う、され、る、も、た、び、く、あ、た、○、さて、頂、日、一、婢、を、買、い、南、總、の、漁、者、の、
 女、と、ま、て、漁、獵、の、事、を、尋、問、ふ、詳、も、答、を、あ、め、あ、れ、海、濱、に、珍、き、
 話、の、多、た、や、と、強、て、た、ぐ、ひ、け、ま、づ、涙、か、た、ゆ、て、い、や、う、妾、が、祖、翁、年、
 老、る、ゆ、名、漁、の、あ、ら、う、さ、う、う、小、魚、籃、を、造、る、を、手、業、と、け、去、年、三、月、
 節、供、日、自、ら、造、たる、籃、を、提、て、近、隣、の、児、曹、と、俱、潮、干、の、貝、を、拾、ひ、
 出、け、る、ふ、其、所、得、の、蓼、螺、拳、螺、沙、嚏、比、目、の、類、多、り、遠、く、進、歩、小、随、て、得、
 ゆ、年、老、の、慾、あ、つ、ま、ま、一、ツ、も、多、く、拾、い、と、て、児、曹、と、あ、ら、う、た、る、と、拾、
 て、帰、り、し、小、祖、翁、の、う、ま、ま、あ、ら、う、小、悪、風、俄、ふ、起、り、潮、水、立、ご、ら、ふ、至、り、し、ゆ、
 船、を、ゆ、て、ち、さ、ぬ、成、助、ん、と、ま、ま、ご、も、節、供、の、遊、び、ふ、ゆ、て、男、ハ、一、人、も、家、の、

をうむ遂ふぢさぬ魚の餌とありぬ慾をわさるぢよた程小貝とむらひ
て児輩とこの小帰らふとて母も歎いぬと法然は語さう母のまよふれ
まうて按て拍て顧く吾が夫の著述も考証多うんを貪りて筆の余毛
短たをひまうていかの老夫が潮干の貝を拾ひよむと發明と群籍の
涉獵を茲ふやめ学の淺瀨み筆を濡しつさるゝ文の海ふらひのじ
める文具もあまもあましく或ハ澳の玉藻のやうな儀ふようたる儀とて
其原をさるぢよとてむらひもあやむらう○其もく此書の全
部らうさく假字を下あうひ引る漢文の物の文多と假字とまぶ
て読下の文ふらう少く指摘たうのさるぢよかをつけあうひの事と解は先
下ふ俗言を用ふるを總て書物と疎き女児倚りも読易く通曉せ
まやうふとくこれ所為らう陋作争う識者の規を俟ん○中古の女

装ハ當時の物語昏ぢよ甚多一實記ハ論わけと竹取源氏らうの
作り物語ハ確証ふらうぢよ似れども其のさるぢよ人其世の風俗を
らうらうらうめさるぢよ証拠とま○書を繞て抄録せし時筆は用ふ
ゆらうて巻次をかたわらせもあまも引用臨て再本書ふ扱べんれ
ど其書もふ遠くて其のまふゆもあり○近き世に女装忌諱ふ
觸んとぬの事ハ棄てあるさるぢよもあなり○抑もや女装の書よこ
ゆるの事ハ同くして緒書ハ散見し物ハ異ぢよて類証のあなれもあり
其まらうものさるぢよかの考料抄ふらうぢよあなれつと書とあまもめ
引細の多端はらうむらうぢよ且ハ紙葉の多を駄ひ省たる事つと多し
○檢証の古圖もあまもさるぢよあなれつと詮用の圖のみをかせり
蓋し新圖を載らうらう児女の眠を驅の○此書全部の昏辭和漢雅

俗の言辭を混淆て俗ふり人鶴文章草あふひのき淺字あふひありあつのみ
 ろくど杜撰の説管見の弁嗚呼大方の笑をいひせん

弘化四年丁未二月廿五日 江戸 岩瀬百樹



寛永中湯女繪縮圖

此圖の事ハ附言ハのり

真顔翁が問

答云

古画一覽



眼下の地女
 あつり遊女あつりその着別

わつちがういども人物の風を考ゆ時代寛永中婦人其比の湯女あつり然わりのよりハ
 垂髪の子女小袖の模様丸の内小淋の篆字とあつりるハ湯女と髪あつりひ女と由古く

▲絵やう極彩を帯のいづきも糸組とての
 所謂▲名護屋帯なり
 ▲女のかつ竹まきるハ古圖
 ▲地わさだりやうあつり帯あつり朱一段つ
 わつちつんぬ此人物ハ地女あつり

唱のあかみあつり
 訓沐の字を模様



わつち女と人
 曉と絵師の機轉
 比丸冬一のりやうあつり事ハ目見多のゆゑ其比及の髪洗ひ女ハわつりりやうの物着たつりんも
 あつりびのび湯女とてたつりも湯女の事ハ寛永十八年板持をる物持湯女といひてあつり
 めのり女ども廿人並居て風呂入りする客のあつりをき髪をそぐ其外ハ容色たつり心さつり
 わつり女房ども湯よ茶よと持茶うたつり世かたりとつり枕席ハあつり盛つり
 事ハ明暦万治の比の物あつりあつり依之絵あつり事と存い
 以上真顔の
 こゝ人也

歷世女装考卷一目録・前編之部

- ① 鏡かみ比始原もとまり
- ② 方鏡ほうかみ 四角ある鏡をいふ
- ③ 柄鏡へまかみ 今いまは如ごとく柄え ○神佛しんぶつみ鏡かみを奉納ほうなする事
- ④ 八ッ花形やっけがたの鏡 ○鏡かみは異名いんめい
- ⑤ 唐からはかみとといふ名義なごころ ○鏡餅かみもち
- ⑥ 鶺鴒せせりは鏡かみ ○鶴つるのかみ
- ⑦ ちりりちりりは鏡磨かみとぎ
- ⑧ 松山鏡しょうざんかみ
- ⑨ 懷中鏡かいちゆうかみ ○西土さいどは懷中鏡かいちゆうかみ

- ⑩ 鏡かみを照てるして面見おもてみえをむ
 - ⑪ 鏡臺かみだいみ守まもを掛かる ○椰やしの葉は ○鴛鴦うんおう羽はの事
 - ⑫ ちりりちりりは鏡臺かみだい ○西土さいどの鏡かみ乃なり聲こゑ
- 櫛くしの部
- ⑬ 櫛くしの權輿ごんご ○擲な櫛くしを忌い ○湯津津ゆづづ間櫛まぐし考
 - ⑭ 櫛くしみ扱あて神代かみよの人ひとは躰量たゝみりやうの考
 - ⑮ 黄楊わうやうは櫛くし ○沈しづ乃なり櫛くし ○玉櫛たまぐし

通計附録共二十七條

歴世女装考卷一

江戸 岩瀬百樹 編撰

一 鏡の始原

わが女中の燕脂鉛粉を顔に糝ふに敢て好色の為めは是れ後
あり祝事ありさきばくせりあるありはくは女中の奉先も朝夕
假糝^{けいせき}のふるに賤き市中の女も不幸あるは素顔を禮儀と^{まじ}或は
後家とありて厄ふるあるは名貴賤ともけあるは成る成定例とせ
さきを假糝を祝事と^{いひ}素顔を不吉とせ是御国のみならず唐国共
古今の通儀ありさるる女と^{いひ}た屋敷のけけけけ忌と^{いひ}あ
く^{いひ}持のけあうするふ第一の必用あるは鏡ありゆゑは鏡の女乃守り
とて女の魂ともいひ俗言はあう縁故ありゆゑは鏡と^{いひ}鏡とのみ物と
日本開闢のとどめよりあり物と^{いひ}て神代卷上を按ふ國常立尊乃

御子^{みこ}天鏡尊^{あまのかがみのみこと}との御名あり鏡とのみ物ありとて御名中も号けらり

さて鏡とのみ物のこと^{いひ}「同書同卷」伊弉諾尊宙を御べた珠子と生ん

とて左り乃御手^{みかた}白銅鏡^{しろどうがみ}を持^{もち}則化^{すなはち}出神^{いづみ}有是^{あり}を杏灵尊^{あまのりょうのみこと}と謂^い

右の御手^{みかた}白銅鏡^{しろどうがみ}を持^{もち}則化^{すなはち}出神^{いづみ}有是^{あり}と月弓尊^{つきゆみのみこと}と謂^い又迴首^{またまわす}

顧^{みまも}眄^ま之間^{のま}則化^{すなはち}神有是^{かみあり}を素戔鳴尊^{すそねのみこと}と謂^いと^{いひ}天照大御神^{あまてらすおほみかみ}あり月

弓のみ^{ゆみ}是鏡^{これかみ}とのみ物の国史^{くにのふし}ありとて始^{はじめ}ありけり又鏡^{かみ}を作るといひ

海神^{うみのかみ}事^{こと}の見^みを^{いひ}古事記^{ふること記}に天照大御神^{あまてらすおほみかみ}弟^{あに}余^{あま}の須佐之男^{すけのみこと}命^{のみこと}勇猛^{ゆうまう}

ゆゑにさ^{いひ}劍^{けん}の悪^{あく}態^{たい}を^{いひ}やみ^{いひ}御^み姪^めの大御神^{あまのみかみ}畏^{おそ}ひて天^{あま}石^{いし}

屋戸^{やと}を^{いひ}閉^してさ^{いひ}坐^まなれ^{いひ}世^よ常^{とこ}常^{とこ}間^まとありて万^{よろず}妖^{まじ}を^{いひ}しゆ^{いひ}八^や百^{ひゃく}

万^{よろず}神^{かみ}天安河原^{あまのやすかはら}に集^{あは}り思^{おも}金^{かね}神^{かみ}に令^{たま}思^{おも}事^{こと}計^{はかり}大御神^{あまのみかみ}を^{いひ}ゆ^{いひ}たてまつらん

たりぬ天^{あま}宇^う受^う賣^う命^{のみこと}は可^{たが}笑^{わら}技^{わざ}を^{いひ}せん^{いひ}其^{その}御^み弊^せを^{いひ}用^{もち}る種^{たぐひ}の物^{もの}を

造^{つく}る中^{なかつ}小^こ古事記^{ふること記}曰^い科^か伊^い許^こ理^り度^と賣^う命^{のみこと}令^{たま}作^{つく}鏡^{かみ}とあり

古語拾遺^{ふることしゆい}に次^{つぎ}の度^{たび}に鑄^{つく}る其^{その}状^{かたち}美^{うつく}麗^しとあり

さて其時天香久山の賢樹を根と定めてかの石屋戸前小建て其中枝の
かの命が作りたる御鏡を掛する事日本紀御鏡の形状大さき古人の説わきと鄙華より甚思は羨みあるさば
八咫御鏡の形状大さき古人の説わきと鄙華より甚思は羨みあるさば
此神鏡を天照大御神御身を離去するが傳国の神室とせさせむ
ひ一弟古事記 御天降段小御孫の瓊杵尊は八尺勾璫鏡及草那
藝劍を授むひて為天下主とありとあり詔命古事記此之鏡者專
為我前御魂而如拜吾前伊都岐奉下とあり此事日本紀より小異あり
俗いといふものかみりつがなまひひられりておのちのちもつとありひいひい
ものことあり天照御神の女神を御座ゆ陰象の鏡を御魂とせさせ
あひあはる此故實の本拠は鏡を女の魂といひ守りともいふあり西土とも
古鏡の可辟邪魅禳火災ともするより五雜俎卷十よんたり右のどく鏡は
女のなまひひいひが鏡ととも裾巾もかけざるや清浄よまきたおどし

清少納言今弘化四年丁未の御時の宮女あり
外 するものめでた女のかみまよりとやうのねもなるめとこりへり八百年の
むらもたまは鏡を磨がゆらぬふは鏡にけて拭ひ硯の七々よのみ洗ふ
とりのひ墨もやめたるへとせると清少納言ころもあじあや○さて外
の事どもひて鏡の神代よりありおあ女中の用具の中にて第一尊むべき
物あるとある一鏡の魔除もあるおあわ禁中より簾もも掛御船も
あり一奉 榮花物語みえり○西土にて鏡の始原の亮の時をみて鏡を
清するより 事物紀原よんたりけとを鏡の故事の和漢の昏よあまき散
見を抄録おあがく事ありの取かづきよかたのその
○因云 北白瑣譚前編尾張岡名古屋の入口前津といふ西の人より向翁と
いふが古鏡を藏する内は神代の鏡もあは蠟思摺る鏡五ツ六ツ見
しう云とあり神代の鏡と鑑定するよりあはれれど其形状もつとに

つ 因由のせざるの遺感ありおのこ世書を作り古圖をも載んとやりの名
古鏡を藏する人よりふいたりのありてをひそふ神代の物とありの
一枚も見む **集古十種** 古銅部ふ古鏡百八十八枚の圖ありども是ぞ
神代の物とありのついで一枚もふを繕る物成伴の書ふかの翁の
所藏に神代の鏡五六枚ありといひのついでありけん見ま
りけきと淵中の珠をればせんをん

(二) 方鏡 四角あり

鏡の月ふ象る物ゆ名圖を本形とせしむる **万葉集** 今より千年なり
真寸鏡可照月乎 同書 **銅鏡清月乎** と月ふよみかひされを圖に
交明一西土よもまらるるを本形とせ 博古圖・宝鏡用始
方鏡あり用ひさるる造り物とぞありの **西京雜記** 漢有方
鏡影倒見といひの機鏡あり **延喜式の内匠寮式** 今より千年なるの
鏡

御式をかり 御鏡一面方七寸とありて御鏡を清く・熟銅・炭・帛・布・油・
鑄師・磨師の人数をも委しきあり是の帝の御鏡あり方鏡も
古くありしをん

(三) 柄鏡

柄のほたる鏡成唐土ありの柄鏡といひくと古くよりあり物あり
淵鑑類函 卷三百八十 李氏録を引て 舞鏡あり柄漢武帝時舞人
所執鏡也とあり **五雜俎** 卷二 大中橋の民陳某脩宅垣中へ長
柄の小鏡を得り云とあり 以上漢文を和漢やも鏡小柄成作る事乃
考へ下ふのべし ○さむの神佛ふ鏡成俵養まることあり其いと古き
肥前風土記 昔息長足姫尊 神功 松浦山ふ在て遙小国形と覽ふ
て勅祈曰天神地祇為我助福乃用御鏡此処ふ安置其鏡化為石山ふま
名て曰鏡宮とありかやうふ神ふ鏡を奉りて祈のありとまるかの天岩戸

の御時ふ鏡をほくらて奉りしる故實ふ扱ふる一
今の時賢本を根とせしるを引くも若戸の所根とせしる
さる本を若戸の前ふたを吉事ありとぞあり 中昔 七八百
の比及ふらるる
佛法盛ありしゆ名佛ふも鏡を供養する交とありて
柄鏡を新ふ瀆て奉納する事とせんたり
更科日記
信濃国ふまし一時以前後河せしる事どもをせふむをえたる
さるらうふむむの国を通りし通ふたふ事どもありし
さるらうふむむの国を通りし通ふたふ事どもありし
さるらうふむむの国を通りし通ふたふ事どもありし
孝標が女の作者多かみ成奉納する処の文ふ「一尺の鏡をいせせに
えりてまのうせぬ中畧たてまのうかみ成せむさげて」とあり
たてまのうふ柄を作ら建むる便利とありありきと柄鏡のこふつひ
一ツの話あり事長りれど好奉の人の話柄とあるを
○下野国都賀郡鹿沼の村長ふ山口四郎左エ門安良との人篤実ありて
学を好む現存の前年押原推移録との入書成岡板をその下の巻に万里

小路中納言藤房の遺器柄鏡の圖をわけて作者の鏡ありてふ摘
要であるを○「下野國都賀郡・西見野村長光寺の境内ふ山あり里人
長光山といふ山のふりてふ澤あり菊が沢といふ明和四年丁亥正月廿八日
長光山の裾霖雨の爲に崩まかの菊が沢より堀りしるもの・銅の塔高サ
内ふ觀世音を安置せし・柄鏡一面を下ふ國・古錢二十六品數九百七十六文
宋の世の淺也 ありけり件の柄鏡の陰ふ不二行者授翁とあるふまらち
藤房卿あり世成道とありて此地に隠れありせし事八月藤州やのみ
草子ふえたり・抑此郷の後醍醐天皇おはせし博学の賢相たりしゆ名
天皇の御失徳をあらし諫ありしと不容ゆ名道世とありて終る西と
まらざるより太平記・三楠実録にもえたりとてかの長光寺ふちり玉田
村の境に不二菴前といふあり 慶安二年の 菊が沢を堀りしる鏡の陰に不二
行者とあるふ符合されば藤房卿此地に隠れありし事明けり
以上推移録の
本文を摘要せ

○百樹案は日光驛程見聞雜記多記標蔭鹿沼馭の条は件の藤房の

柄鏡の裏ありて推移録の説ふ如く其の細註は「予が十四五歳乃て後

下總国亀有とのみありて是又瓶を振中けりふ内ふ銅塔ありて観音の像

一体經文古鏡古鏡あり塔の高さ七八寸もありて怪いことづくことあり

る成はるはしく沙利塔の内は納めおけり古鏡も金と銘は「整衣討謹

瞻視」と陽文は鑄付たり藤房卿の物ありとて先考の許ふ持来りて示を

者ありし外は藤房卿といへる怪ある証拠もありしぐさし事ありあり年あり

ぬけありければ心をこめて見ゆせと唯鏡の銘のみ成愛居りあり大抵下野

みく極ありて附と同一はもありて誠ふ歴年土中へ埋りたる冥物人

間ふ現る事神佛の加護ありあり不思議ありし事あり藤房卿後ふ

京都妙心寺の二世授翁宗弼禪師と号す細註とあり標蔭先生の云々

ましくもかの菊が沢より出現の柄鏡と同種の物あり又集古十種細註の部は柄

鏡の圖ありて大坂商家吉田道可所藏とある其圖とかな押原推移録よのせ

なる圖と同書より引る日蔭州ふものせの圖とあるをみる小丈さも銘も

たがふ事なりしは藤房卿父君の菩提の爲は件の鏡を幾枚も鑄く

考ふの爲ありて所の霊場ふ瘞あり物のむらむを五百年可下ふのいへ

土中ふきり物今世より鏡三枚あり標蔭先生の云々の也何地より

あひもあるべくも然おのふ一ツの話あり○天保元年七月百樹季子

京水と後て豆州熱海の温泉ふ浴して廿日あり旅寝の徒然は熱海

温泉圖彙といふ物を江戸より作りて板本とす作らるる其の古跡をたぐひて附

同所の温泉寺妙心寺より住職縁起と叩くは山を謂ふや此寺は

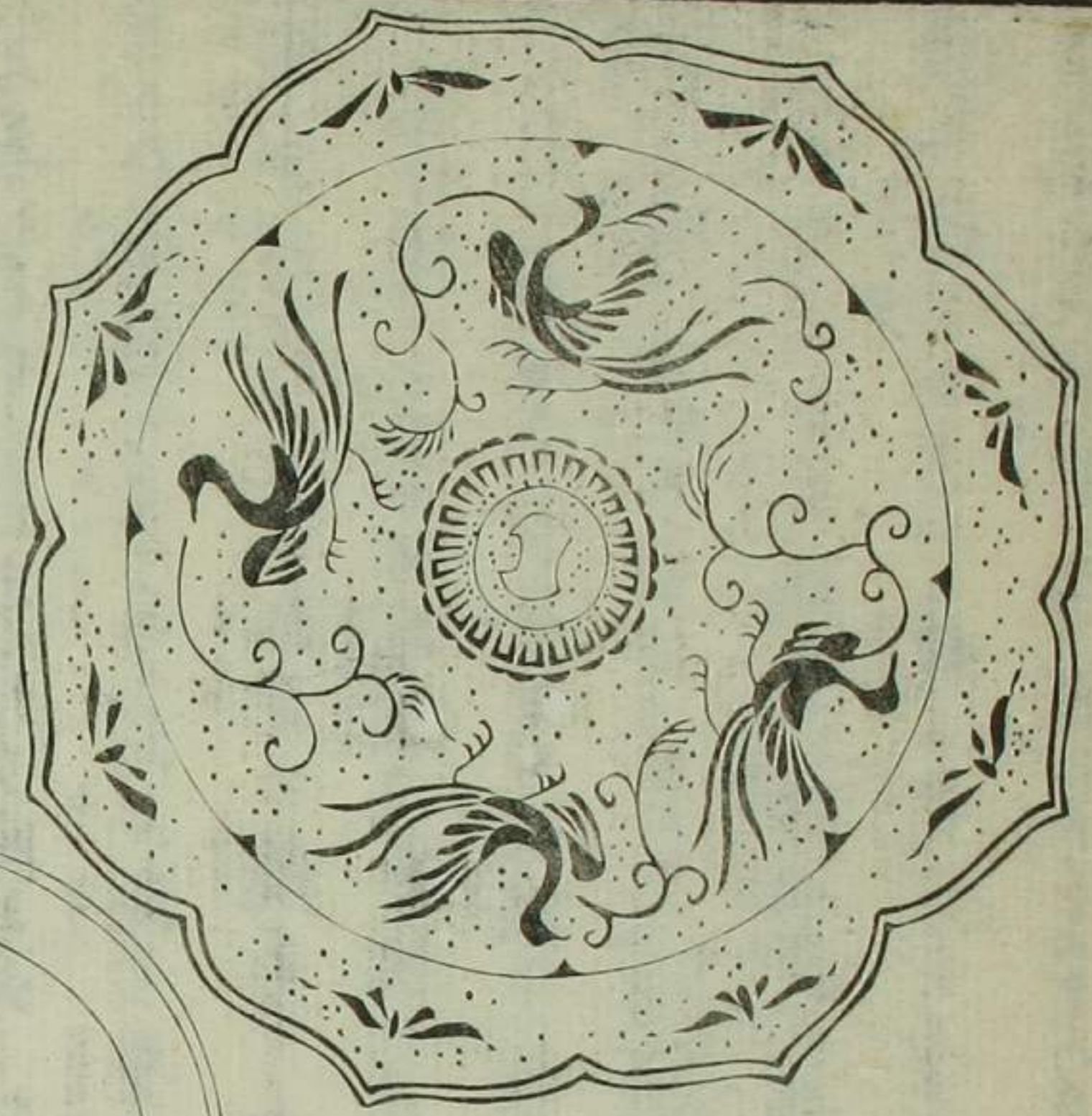
頼朝卿の建立あり中奥の祖は南朝の賢臣万里小路藤房に法名授翁

とて此寺の住職とすしふらより本山妙心寺の二世は登りありと語りさるる禪

師の遺物とあるり拜せんとていひられがせらる相・禪師自画自讃乃

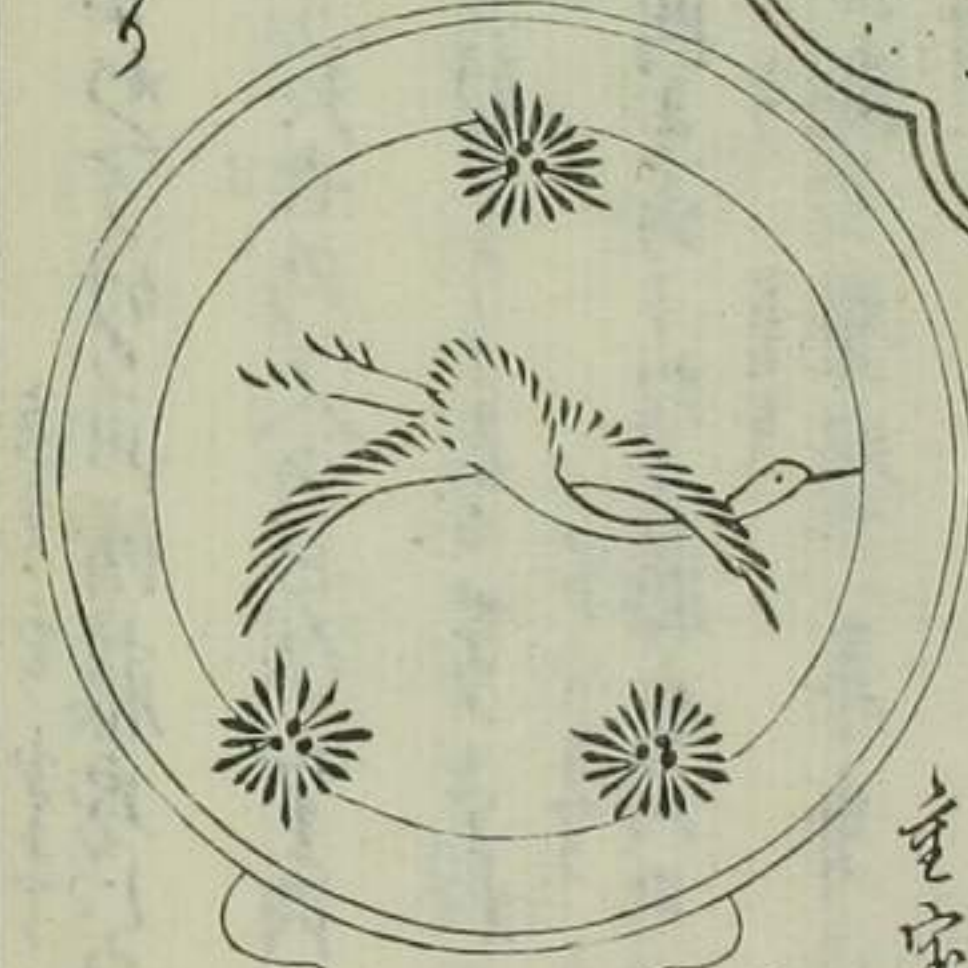
肖像・袈裟金・數珠唐物のをどきする事あり庭中小川に禪師自植の松まろ在ける古木の高浪あり一付枯たりとのちも同下たる若木と植をえ
古木の香合たぐくを作らせ今秘蔵ひかくすておの供養くやうの爲ために此寺このてらをどよむかの
品ものを埋うめあひしもあるべくも熱海あつみに藤房ふじふさの古跡ありといはれひより
ざりし好事こうじの爲ためにぬ○せむく藤房ふじふさの遁世とんせいに南朝なんてう建武元年
北朝ほくてう元弘二年げんこうにん時ときみ歳とし三十九あり太平記卷まき十三藤房ふじふさの遁世とんせい之事このことといふ条ちゆうは遁
世とんせいの哥うたとて「傾かたむすの山やまとてさ世よの人ひととて岩いわや庭にわの松まつよとて人ひと件けん
よつる旧跡きゅうせきの事ことぞの成なりおひひのせを遁世とんせいのち西朝さいてうの乱らんを避さむひて東
國くには飛錫ひよくしあひ跡あと成なりあひひ蹟せきしあひし事こととぞあるる
刑部けいぶに義助ぎすけ朝臣てうしん越前えぜん國くに曾そ巢山そなうは城廓じやうかくを構かまへけるよ山の案内あんないとあるん
着山ちやくさんふくしけ入りしよ松まつの系けいもて昔むかしより庵いんありまよふれば木の系けいを集あつめ
ひろとありある石いしのよふ法華經ほふけきやうをかけるのみならず何なにもなき老らうを

あつてせむをともへたる傳でんのちよかうける此僧このそう藤房ふじふさにまうけるふあまびるひなれば
かの石いしよあありあつて由よしまうた世よの人ひとのこひを言いはせりやや雲うみよやどりてあ
てん」とありてゆくへまはげのけるよあるせりされし山やま國くにももとてかこ
からまわえせしと見えたり國くには出でたる藤房ふじふさの鏡かみの面おもては興國きやうこく四年しやうねんと
あり南朝なんてうの奉号ほうごうよて小朝せうてうの歷應りきやう二年にありけま今いまより弘化五百
余年よねん以前いぜんもも柄付えづけの鏡かみあり一ひと枚まいあるべし蓋けずさししる日記にちぎある柄付えづけ
は鑄いさそく長谷ながたにの觀音くわんおんへ奉納ほうなつするがみらあるに藤房ふじふさの父君ちちきみのよ
ありしおひするがみをのて換かし鑄いさせせ其その眞福まふくの爲ために觀音くわんおんの像ざうと
俱ともよ死しへ埋うめせあひひさありあつておの供養くやうの爲ために此寺このてらをどよむかの
まろむりの風儀ふうぎあり續拾遺和哥集寫本しやくほん「公守朝臣こうしうてうしん母はは身み海うみより
のち朝夕あさゆふをまける鏡かみは枕まくら字あざを書かき傳でん養やうしけりける道守だうしう階かゐはまろてま
のわたり後徳ごとく大寺たいてう左ひだり□かた良らのりよまつてける法印ほふいん澄憲じやうけん哥か・是こゝ一人ひとりの影かげを



右八集古十種古銅部中山城
國大原古知谷阿弥陀寺藏
古銅の圖三十面之一

本書より大さ圖の如くあり



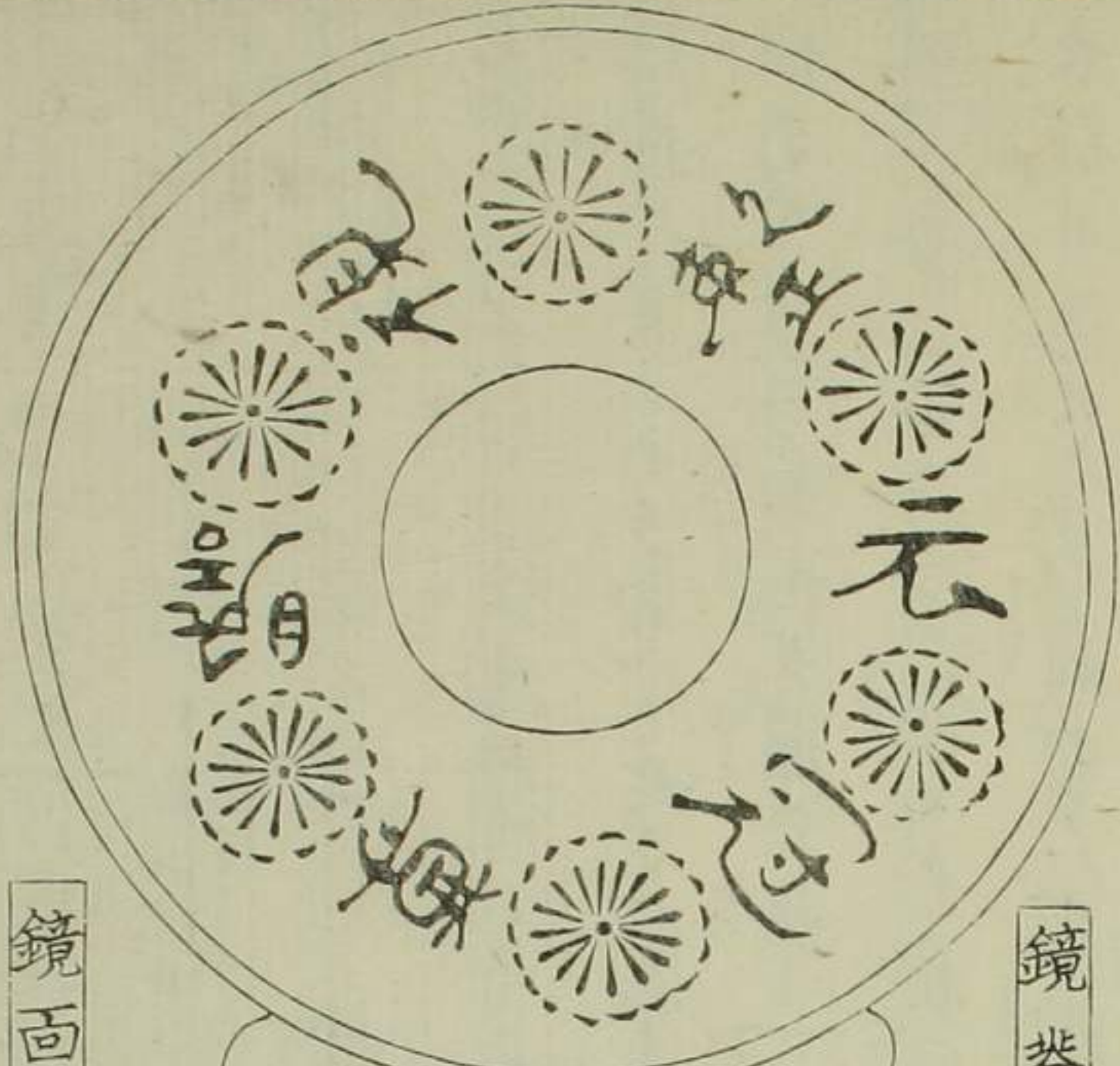
和物柄鏡大さ圖の如く
山東庵所藏



山東庵所藏

○唐物硝子鏡
たて二寸七
よこ一寸七
金質極細
細工がみ硝子
絵やう彫あげ
圖の如く柄は
わがま内り

右を四五百年の物と云
拾遺集に伊勢が後には
て鏡の形とせ侍つてといひ
あはれなるわがまありけん



鏡背

鏡面

右の押系推雅録卷下よりとれたる圖あり
此鏡の後醍醐天皇お仕(五)ひ藤原の
の遺器也其事実の本文を詳あり寸法
徑三寸八分・柄の長二寸八分・柄の幅上より五分
下より六分あり此鏡を極大なる長光寺純板も同く

是等の外一覽ある徳家の所藏和漢
の古鏡を際宮なる國中万鏡柄鏡あり
ひいのはまを稱する万治高尾がわらわ
わん鏡など出でたれどこれ余地あり
とぞく

興國四年辛巳三月吉日
寶祚長久兼藤三位資通郷公
當塗王經一字三禮一品一錢千部
藤従一位宣房郷公福壽
不二行者授翁敬白

ありし僅ふ百年以来の事あり古た柄はたの如きものありし
これと髻鏡といひ圓鏡を鏡鏡といふ
「若き時持ののてやびんかみ附々伽羅乃油もかき女房」
落葉集 神もかみさことたの
周云本朝のむい貴賤
西土の柄鏡い合せかみゆを便利ゆあるべし
ゆひく其状の名さ人あまをわれば合せかみもあつらん
年板本朝 卷三小蓮といふ美人の傳は「小蓮性のき粧飾を愛自雲髻を
梳毎小就面双鏡を以て細照稍一絲有乱髪は必侍婢を呼て分理」とあり
西土の柄鏡い合せかみゆを便利ゆあるべし

四 ハツ花形の鏡・鏡の異名

鏡ハ菱の花を視て作りと下り物といふ事西土の書ハ教見を即鏡乃

異名菱花といふ古菱・紫班・紫珍・鸞頭・百練・壽光・散文・白崎これ
みる鏡の異名あり菱花ハ即ハツ花形あり 橘菴漫筆 小撰州今宮乃
社の什物の鏡ハ菱花の真鏡あり 裏小文字ありとこれハ和鏡あり 各風
奈良七代の頃とありし」といふ 孝良七代ハ本良ハ都あり一四十四代
是千余年以上の古鏡ありその文字も圓もかたゆさる遺感事あり
けり西土の鏡譜といふ書ハハツ花形のもの大小ありしとありん一若年
の鏡ハ

五 かられかみ〇鏡餅

一条院の御世の間ある物結昏どもよかのかみといふ詞ありし其
一清少納言が枕の草子ニ卷 心されかみさるる 「かられかみのま」
とあり此比及ハ唐團の便いと易うしゆ名萬の調度大なる唐物を用ひ
ゆ名唐の鏡もせむおやしん今も神佛の什物とせし其の持は

とて鏡をたぶらば唐物ありきされど千年以前の和鏡ハ唐物に類せ
れやま具眼を鑑定せしむるは鏡の圖をたぶらば

○周玄今又鏡録とて人物と古くよりありし物あり 濱松中納言物語卷四

「のちひかみ」とあり 源氏物語の巻の初月「あかこふむきおつたふあ乃

いひひ〜てのちひかみとていふやうにせしむるはけがれなきもの

いひひ〜とて「又 源仲正家集 元日恋」千代もたも彩霞あり

ぐく遠んといふ鏡ののちひかみなり「用ひ候ふひひなり」彩霞あり

「とあまを今いふあそ人のごとくかきよ〜あふもあつらんのちひか

餅の事形圓た〜脈流といひ〜を今いふひちち〜のいふ月かみなり

をかさうといふ事八百年のむ〜も休のご〜又正月廿日かみなり

とて女中の袂ハ初顔といふ心の東山殿比の堂中女中のまを〜と

あり候はあうの〜あそゆたのいふ〜あうしふ今いふちのちは〜とれとて

わ〜物事自由ある九尺或間をわが家とまる夫婦〜しのものま〜と

〜成がらて初表成い〜あつた 浄代の國澤は浴するゆゑあつた〜と

國恩〜手〜鏡餅のゆ〜又引〜書あれを食物沿革考よりの〜

六 鶴鏡・鶴の鏡

古鏡の陰は何とあれざる鳥のがら成清けなる物初の中は誤の〜と

此鳥ハ鶴なり 神異經 此書東方朔が作とて古鏡を打て清人姚際垣が

を和解を昔漢は夫婦あり支他國は行とて別〜附妻の〜と

ける鏡を破て二片とあり一は成懐あり一はと妻よの〜て再會せられた

ま其妻人又通トける夫がの〜たる信の鏡の一片化と鶴とあり逆み飛

て史の前より再片鏡とあり夫乃知之とれあり後人因て鏡を繕るは鶴と

鏡の脊は為〜とあり流傳度き故事とて〜・潤鑑類函 卷の三百八十一 佩

文韻府 卷の八十二 敬韻の部 格致鏡原 卷の五十二香 匱器物の部 書中も〜とあり又此故事とて〜

古家も多し其の一ツ **散木奇哥集** 俊頼 「まうかみうらうはさひまる

かろだふ心かるるの程はるかる」とあり **集古十種** 古淵 古鏡の圖 古淵

八枚あり其の中み鶴のかみ四十一面ありてのまも和漢の古鏡と云ふ

又古鏡は鶴の模様つるも本扱あり **拾遺集** 賀の部 「かみいさせとるり

けるうらふつるのかみはいつけさせとるりて「ちやせとるあふらのうらうらふ

まむたつたうとを思ふべかりけ」とあり又百年とるるとあるのかみは南天燭

を清けたるもの多し是を **橋菴漫筆** 易の卦象はあてて弁トたるを

鑿説は似たりさやうのむづかしのあはるむ南天を雜轉と名給て唯

轉る祝事ありゆゑ又嫁入の轎もあんでんの葉成いりあり此物成食

物のかひしふまるの南天燭は毒成消し氣力を養と **本草** は身入るゆゑ

これ毒であとよる信のかめて南天を清く入るる

てく

むうのかみをさみ酢漿草の汁成用也 **夫木抄** 鏡草のあふ家「かみと

のそふおひるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **鶴岡職人盡哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

とあり又石掃子の酢も磨くととる **七拾一番職人哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

かみ **かみ** ぬるるかみ草露さる月と影みたるは」又 **七拾一番職人哥合** ぬ

ざんろりて事まみりるをりかみまの事家兄の骨董集の中ありきて

人倫訓蒙圖景 元録二 年板 ねみどだの条に「鏡磨るまかむはあやとりのよは涙を

合せく砥の粉をまじり梅離るそごさう」とあり又「のちみよ州」 寫本全五卷 正徳二年壬

派の霜月筆を石花菴の巻「母のちあふ我がなきまらじ」寛永の頃いみみ

ざくゆの汁をそだしおぼのちの梅の離るそ年中みぐとまよ世のう

らありし一ツまうといをまじり「さあははらくおのへ昌平の岡澤おはれて女も

假粧をたあみ鏡もせま多くありしお名鏡磨もゆらぐさうらと梅離

よあさるあさべし世れ中のかさるも安居お鼓腹するゆあさうむ

世の中は鏡のまなめり「証柳のまきとよみくあさべし」

八松山鏡 昔仏の長者の子新は婦をむくへはあ

時史婦は語曰郷厨中み入りて蒲萄酒を取来れ共飲んと婦往て甕を

開き自身の影のうらむと見て謂更は女人ありて此甕中みかきおくとねのひ

還りて其夫よいみやう汝自婦人ありてかめの中み藏著あがう我を迎ふと大

お悲なれば夫いぶくく厨み入りかめ鏡ゆきま己が影を見て逆てその婦を

恚て絹汝こそかめの中み男を藏かくれと夫婦相念恚自呼為實のひ

あうそひ誼譁して不止時よ梵士来り毗丘尼も来り此更まきかめ鏡をみ

持のかげうらむ成て伴りてけんことまるとに去る時よ道人来り甕を視て曰

我汝等が為は甕中人を當出とて大石取りてかめ鏡打壊れれば酒あがれ

尽て物有とる夫婦をみりて身の影ありしと知定壞慚愧なり」とありあめ

事を一ツの話として 宝物集 此書は清盛公の巻は後實らとまよ配流せられ 平判官康頼治承二年春帰洛の後作り物ぞ 巻の

四ふ書さるを本拠として作りさる 鏡破の繪巻 學友権 園所藏 との人物あり 東山殿 其の

中よ都の四糸ある見せ棚のまみまき百姓が鏡を買ふ雨の綱昏よ四條通

へゆたなるふ商人品々のうを物かきうたなるうちよ鏡の世のころ態様あり

時のさるるに手近く鏡臺をどわべきやうに枕ののふおたる懐中鏡あり
ありけんう後の物よとる中玉海六百余年前治養の頃の物写本 建久二年六月の糸
鼻紙の間小鏡をいきて持事とてを徴とされが古き小鏡の懐中鏡
ありべし西土ゆめ懐中鏡あり清人紀時作全四冊巾箱本 卷三「新婦拜神懐中
鏡忽隨地裂為三」とあり地小鏡て為二とてかみの薄き事明一因と
おもへ小鏡硝子鏡也清朝にて懐中なる硝子鏡の圖前小出せり

十 鏡を照して面鏡見む

晋書殷仲文傳 小仲文誅せらるる条の文小「仲文時照鏡不見其面數日
遇禍」とあり鏡を見て面鏡のうつろひとありおもふまへといふ如く鏡ハ
威ある物ゆゑ然る事もありけんう地のまき若うし以母の語ある津館小は
間磨せたるかみを替へす蓋よのいとおたふ婢あやまるて踏蹴とてあぶさ
あはれとれは黒く曇りてありやあぶさけるふふみとて婢月のさり

みくありと語まき此かみ今猶家あり陰ふ南天を濟けり常並の
物あると頗る灵あり似う且母の遺器あるは秘藏とてふかくかみり
心まべき物ぞ

十一 鏡臺小守を掛る・椰の葉・鴛鴦の羽

雅亮裝束抄 卷一 小鏡臺小守を掛る事見えり此書の作者雅亮朝臣ハ
治養の間の人あり山槐記 さきバ今より六百余年のむう鏡小守りをか
るもかみり女の護身物ありあり鏡臺・椰の葉・鴛鴦の羽乃は俗習あり
あんてんの事前よりとつても守り紙かざるはよて迎きむうよれ俗習あり
寛永十五年撰 椰の枯葉小守るまが見付出り小守のうとさとうく一 俳諧
正保元年板行

毛吹草 寛永 志の茶浅椰小守り人の鏡る宗房・此宗房といふを浅
俳諧夏の日

廿年 望々人小逢ぬ奉公甘椰の葉の鏡の裏の忘州 河東水調子結句よ
「曇らぬ月の面影の椰の枯葉はをさう小鏡の裏小守るらんるだいかみよ

のこころ

此曲ハ俳諧師若本乾什ガ作メテ東都北土廓ノ妓万宇屋玉菊ガ二周忌追善ノ曲アリ
句々玉をばけねて妙あり玉菊ハ享保十三年三月廿九日曉五才めて身まじり其年ノ冬
まのふらさみの句をあらめて刺しさす・袖さししるハ物み
あたらをかくしる手まきもいらくつまびやくみあるせり ○さて柳ノ葉をかみのえとみ

よりのあるゆゑとちのひをさざれば書ふよりの捜索一ふきた物あり

俗談志四 菊岡沾涼作 延享中校本 伊豆權現ハ豆州加茂郡在神木柳の木九三圍

高さ十丈なる葉厚く堅小筋あり此葉を所持されバ災難を遁ると守袋

み納む又女人鏡よあけハ則夫婦中むりきたとあり一条全文

此事氷解しうき鴛鴦のつらだ羽をみみあけりありぬむつまくとみ

事をし多のどくあえんののりありあひふかの勢ふ倣ひて勢衆をかくこの

のやうみあさびようあんのまびなるもの派とぞ

十一 鏡臺

神代小鏡架もあはれん物ありとぞあはれん物ありとぞ神代卷の天若屋戸の随

真賢木の中枝ハ八尺鏡を取繫するの倣のあみとぞ和名抄の部

鏡み並ぐ「鏡臺和名加々見加介」とあり此書ハ今より九百年以前 源ノ順朝臣ノ作あり此かみりけの

形状の大槩をみるは和名抄より百五十年なる後の物あり類聚雜要

四ふえへる大治五年二月廿一日中宮立后の御鏡臺の

國ありら小臨したる儀を千奉もあはれきかみりけのあはれ

和名加々美加介あるを今のやうみきやうだつとひひも古

源氏物語源氏物語の巻

「いざんをまのまひけあなをはくらひあへころのうとあたるまやう

だのからくげかげのえととぞうのぞう」とあるまやうだのち下あはれの物あれ

かの立后のとの作りざるの精粗のあえけとぞと大うたがふべうぞ大治五年 立后より

源氏百年 さて又今引出のちの櫛箱の上みかみたてを作り付るいと

便利めて進来の物げふもよきとぞ榮花物語 繪ハ九 花とのりハ

またの繪ふ櫛箱のうへみかみとてあはれ多けと世繪入の榮花ハ室町殿

間の物あるよ 安齋隨筆 小考証してこれをたまたま今の鏡を付の櫛

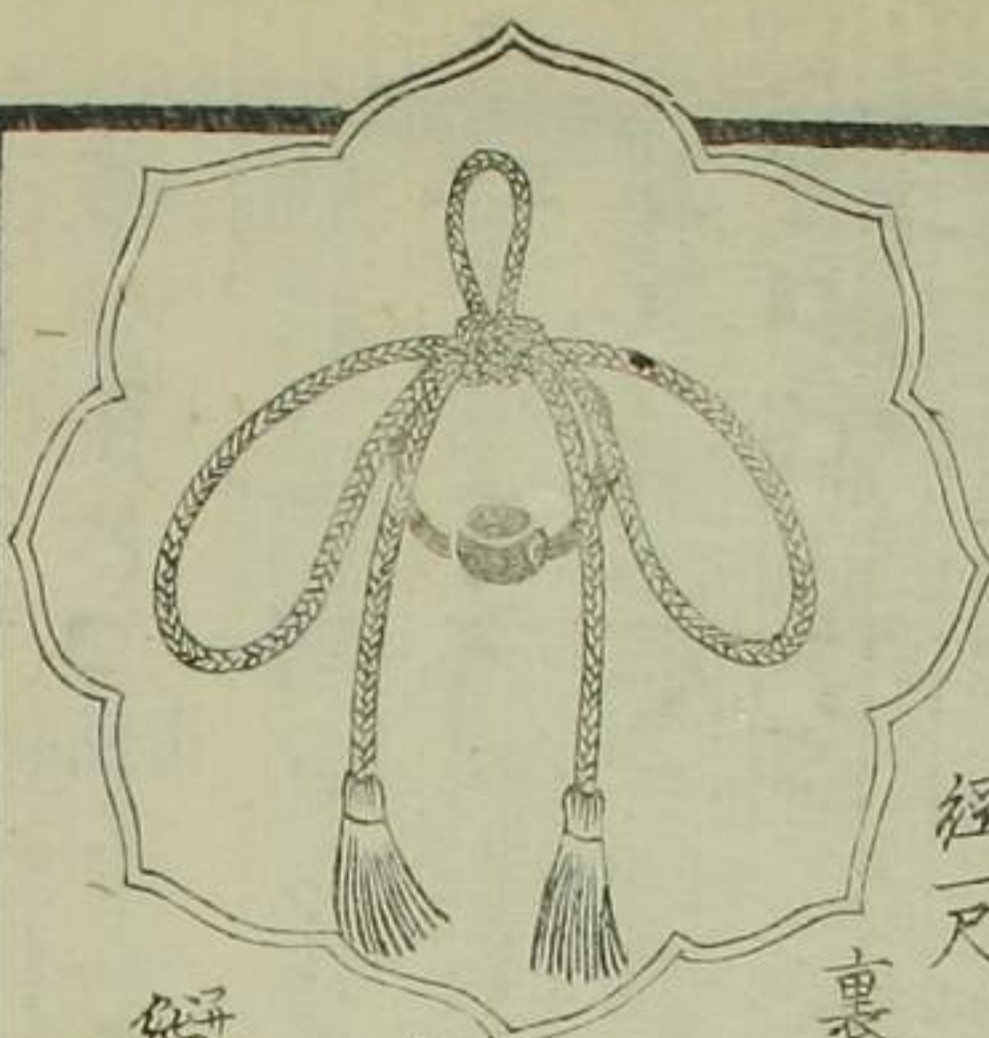
鏡臺之圖

熱河地
右員入り
為給

本書傍註の鏡

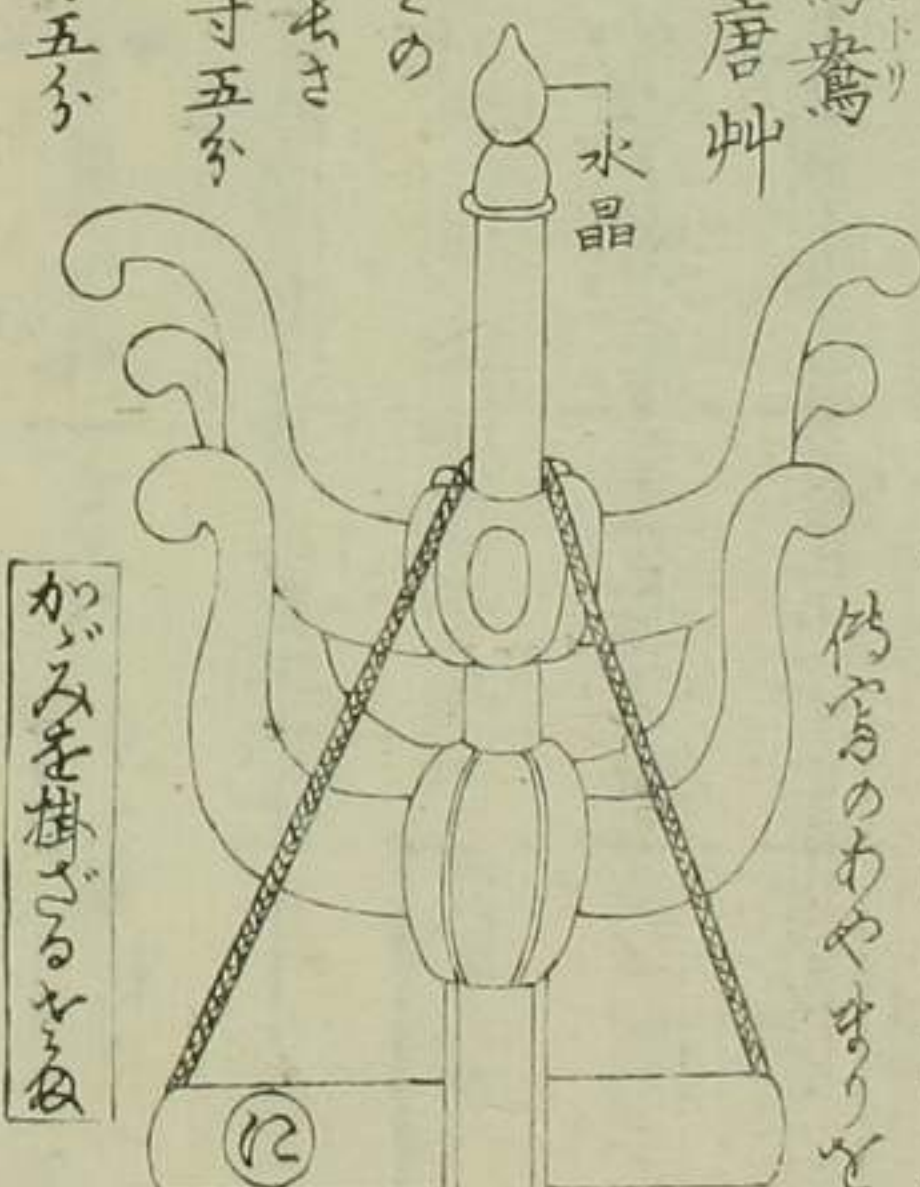
徑一尺

裏鴛鴦
唐艸



加その
緒長さ
五寸五分
三寸五分

水晶



かみを掛るるやぬ

類聚雜要卷四此圖あり是の

今より七百十三年

大治五年二月廿日

藤の聖子中宮より

右に立玉の時の御調度の

一ツあり俗ふりかよめ入りたる具

あり(一)見の糸を組する物

羅網と云わそのひもを

むきびとせる物なり

(二)羅網と云は此脚本書

かくたう脚を二重ふあたるはるぬを

竹ぶるのわやまりと古くつゝあらん

(三)是の脚本書の鏡の枕

務まつむとあり

按はかみ守りあつて
鏡の中より杖の事古書
み所見多し形も筒より
なり

永禄年中の寫本

元服法式に此鏡臺の

圖あり

依ておのひふまよ

たる大治年中の鏡臺

と形あつたれが大治より

四百余年の後に永禄の鏡

臺もかこきあつた鏡

臺の如くありと云ふ

此あり右の図

これ略を

○九冊の榮花物語の巻の
の巻の圖中みよさあり



○元禄元年板

女用訓蒙圖彙

此圖あり

大の鏡臺下あつた

鏡架あり

此形百五十

余年來

今にわたり



けるさる伊邪那岐命より猶前世より櫛のありし物あり奉明一〇右の
黄泉段にて命の刺せし櫛を投棄ありし一史を日本紀自註して曰今世
の人夜忌片火又夜忌擲櫛此其縁」とり斯註したる養老四年乃と
あるに今も擲櫛を忌事千二百十余年前より風儀あり櫛の入りぬれ
〇さて件の黄泉段に「湯津津間櫛」とあるを同書の八俣遠呂智乃
糸より湯津爪櫛とあり本居大人が「古事記傳」に「爪櫛の爪櫛の齒
のさびく間の堅くせまきさる櫛の古の櫛の爪の形ありとも妻櫛の
意多しともいふ誤ありといひ又櫛の本串と同ト名あり黄泉段火を
燭し多しと思ふ上代の櫛の齒や長しし串と同類どくといひ又湯津
の清浄の義又木の名さる櫛のありしむとといひ又同考あり天稚彦が雉
を射所の湯津桂の解より湯津ハ五百筒あり枝の繁をいふといれり
以上此説ふ扱バ湯津津間爪櫛といひ何れ作りし質ありきねど
摘要

櫛のさびくせまきさる今之櫛より長き物ありといふ解あり其もく本居大人を
傳達のちのいと古事記傳よりありたる大家を其説ありしが淺学の
齒口をりて同然すべしありねど竊に謂く件の如くいふは命の櫛の
齒を火に燭しむいさるのみありしむ豊玉姫鸕鷀草不合尊を産みし
御夫の火出見尊櫛を火に燃して視むし一事あり神代卷下櫛の火に燃るは
りて本ある事論をまごせすむ湯津桂といふ本もありしを神中抄ふ
或人云々の湯津桂の本にて作之はげの櫛の如くつまい妻の義」とあり
本居大人此説を信するの前の新撰字經あり「柞の奈良の木又志比」とあり和名抄部「柞四
声字苑云柞和名由志漢語抄云波々曾木の名堪作梳也」とあり湯と
志との音近きゆゆ湯津の津を後年より由之といひけんし延喜式内藏寮
千年の天子の御櫛の事と「年中所造御梳三百六十枚中皆用由志木と
古書あり此後さあすせその齒音ふらけりてゆすの本ともいへり梁塵愚案抄下

大芥の樂催馬哥の解よ也あいあままの木。櫛み物あり又七拾一番職人哥合

今より四百年櫛挽の哥みのつみせんあのこかたらぬもの木也我ぞゆれぬ人の

又本草み柞其木心理比白色堅忍中畧今作梳者是也とあや

とまらふみ扱バ柞ハ和漢のみ梳材梳ハ櫛也事和漢同一柞と近く國よ

ようてまをそくく此木とりハ本草也今偽黄楊とまる櫛ハ柞也神代の湯津津間櫛も柞木櫛もりめとぞのつくらい吾が陋見の説

を且取るみたらむといふも姑く記して識達の教を俟つ○今櫛は作る伊

須との木也和漢三才圖會の本字不詳葉の状みよく瓢樹といふといれ

ど今畧扱み用る伊須ハ島物也柞の枝木を視るみつがれも家作とい

らなるゆりれ物あり櫛挽等みたらむといふも櫛の本をあるののから○さん

津間櫛といふ名義本居大人ハ齒のまげくはまり櫛のまげくはまり海

内みまらるぶぶた人のあら博士の説をあらぶけきと六稿みのへらく齒の

はまるハ櫛の常態ありけぐ梳み對ては櫛といふも櫛ありむのまらる

神中抄みつまの妻の義といふ説み後事愚按み妻櫛といふ義を左右の

髻み相對て双つ刺物をまら也此櫛一枚みの奇み用をまらるといふ

さん上代の男ハ髻をまらつみ結て双みの左右へ館とり櫛もり刺貫て宿む

ありといふ櫛といふ櫛の部みの部也櫛ハ櫛の部也櫛ハ櫛の部也櫛

はまるの櫛をまらぐみハ二度目ハ右のびんぼうの櫛をまらぐみ

見えしれども必一對をまらぐみハあらぬ物也み後事愚按み妻櫛といふ義を左右の

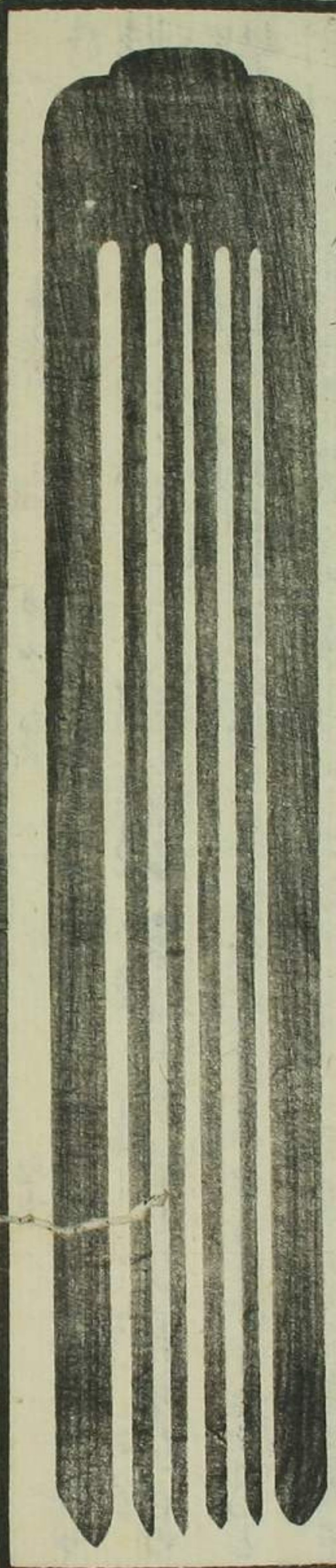
夫乃子我畧さるものまらる○さん此櫛の形状ハ本居大人の説也櫛ハ

本串と同一名あり黄泉段み火を燭一みを思へ上代の櫛の齒ハ長く

まらる串と同類ぞうといふれハ千古を貫く妙説ありみの屍といふもの説

余の視みゆハも子の生まる所也み見の尊の視みゆハも櫛の火をまらる此

櫛長く大きくて一変推てあるれば大槩ハ心みはのせぬと物然たる
 証あるやあつひもひもひけるふ一日学友来りて物語のほひで櫛の姿をか
 ふりのやう前年西遊せし時南都の達識穂井田忠友翁の宅に
 櫛本 といふ物を視し中ふ一古寺の宝物とて神代の櫛を視て摸写するを二覽
 みて心ふ忘むるもあつてとまててその終席上を間記の圖を寫させ
 たり成下みちを此國にたれば櫛の櫛をかざるともいひいへるや
 まるた物ふあつて櫛の櫛をかざるともいひいへるや
 長さ九寸余幅二寸五分余木を作りて物作りさる古朴あり
 木の質糸トドグーとそ



此圖を視し伊井諸尊櫛の男柱をかたやうて火み出さし
 尊の屍を照し視あひしも彦火出見尊のうがやらさ
 の生れあひを視あひしも櫛の櫛をかたやうて火み出さし
 又黄泉段のそらみ櫛を引くたぐちあひを生れあひを
 醜女が接食しそらみ櫛の形ち見ゆ
 但しあひを神通みそらみ其物とありあり

④ 櫛み扱て神代の人の躰量の考

古事記み扱りてあひのやう櫛の歯み火を燭してかの屍を視あひ間
 ありし此櫛大きくて櫛の櫛を刺し御頭も御身長も推て志
 らるあつて種植ふする草も初生の花も果も大なるがごとく国の所
 間の人ハあつて長大なる天地自然の理ありとわひいふ果し
 常陸風土記 此書ハ今より千四百年前和同年中諸国 那賀郡の奈小岡あり
 大櫛と名づく上古人あり躰極長大丘壟み身居て辰を操食 畧其
 大人の踐跡長さ三十余歩廣廿四歩 本書 となり日本武尊ハ御身長
 一丈 古事記 御歳十六の時叔母御の小袖を備着て乙女の扮して他所へ

汗あま交あり 同書小見也此交をさる 此をむぐの身はけりも推てあふべし
の部みくくくひんべし
 此尊の第二の皇子足仲彥命 仲彦 天皇 御身のたけ十丈又大常彥淤刺
ろこけのまこと
 呂和氣命治たけ一丈二尺脛四尺一寸 紀 無仁 又及正天皇治たけ九尺二寸脛
の長さ一寸二分 皇代 紀 ともふおひ比おれバ伊弉諾尊も火出見尊もはたけ
 一丈の余もあけけんし さき 湯髪小刺せま櫛のたけしをもちひやらるる
 中み独り少彦名命ハ鷦鷯の羽を衣とあ さき 大己貴命掌中み
あなて 翫あひ そのま 當時の人妖あふべし 日本 書紀 上代 樹みも百丈七十丈
ある大樹あり 事國史小見也 さし引 ○天竺の劫初の米ハ大さ四寸あり
と 起世經 ふ見也 釋迦如来身のたけ一丈六尺神農ハ八尺七寸黄帝ち
 九尺ふ逾孔子ハ九尺六寸 周尺を今尺ふと 七尺六寸八分 と ちりの書見を以て和漢の上古の
 人のたけしをあらふべし 又上古 人のたきか 証 批の残り ハ 新著聞集
之編 阿州勝浦郡大原浦千代ガ九觀音堂修復の時長九尺八寸横四尺

余深き二尺九寸の石櫃を掘出せり 関 きたれバ骸骨一具あり頭の廻り
 三尺七寸額より腮まで一尺六寸齒長一寸五分左りの奥齒より右の
 奥齒まで一尺四寸外み劔二口あり一口ハ長さ五尺五寸中三寸一口ハ六尺
 八寸中二寸五分鋒の必一本長三尺中七寸矢根廿五本各長一尺二寸
 元祿十五年壬午四月廿四日の事あり 鳥 この人物も 写本
此交をあらふべし 寸法時日 此骨小肉有 大人あふん又新著
聞集 同 延宝三年鎌倉深沢洪水あけ崩きこころ三尺なるの頭骨あり
たれゆ 小齒の長さ一寸八分若宮小路の渡辺氏その齒一枚おきこころ
ぐろ 本の所へ埋 と 又 諸国風土記 写本寛政十二 奥州義経腰掛
松の条 小 半田村百姓善右エ門ガ地小古塚あり を 享保二三年の頃
ゆ ありて 極崩 ける 小人の頭骨あり 三尺四寸上齒四十五枚
 下齒二十六枚齒の長さ一寸四分其齒一枚の家の小 さ 成 友



京水筆百庫



地を掘ててくむ大人の枯骨を出す

岩本寛矩その家小一宿して見ると結わう」又見聞奇談字本十五卷

作自序九華 卷之三「頃日官車を飛驒よりわたり一人の物結ふ飛驒

山人とわり 関大原郡の内は山霖雨崩れ大石道へおちたる其跡は石棺あり山賊

ども折より関をこれに駭骨あり頸の大き四斗樽をどり骨々も大

まく太刀一振半朽飾も碎て見ると日く目くまあり一六棄置くべし

と山賊がえりてを村長聞て翌朝村長が山賊の穴はほきて其跡より

見ると石棺ふ蓋にて元のごとく不思議ふわひそのまき埋めさせり

その村長が語りきと去年五月の事ありとを吾が関一の事保十七年

二月十五有る」とあり是等みる上古の人の死骨ある事らうかひありされば

上古の人此長大あり一証拠とまべし

(十五) 黄楊の櫛・沈の櫛・玉櫛 櫛ハ和漢とも木めで作りて下あり物あるゆゑ其の字も木・梳いあり

批いさたぐ。篋いさたぐ。多し此字のみ从竹よりハ齒ハ竹より作るゆゑ也

唐より始る物ゆゑ今も是を唐櫛といふ櫛の字ハ櫛の總名ありと

字彙 小見えりり○櫛むく上古ハ櫛の木あり櫛を作らるる前ふりる

がごとく今ハ貴賤その髪ゆるる黄楊の櫛を用ふ賤の女の刺櫛おも

まろの今日本國中の風あり此は櫛は此の千年まへより賤の女のさへる

物あり 万葉集 三 志加の海人をりて海やれいよまみくげのをく

とるも見あふ 此のいよるあれたゆゑ此の髪もほろひ 此歌を直直と 伊勢物語

八十段「あれ櫛のあふの海やさいとまみくげのをく」もさおはふらり

七段「あれ櫛のあふの海やさいとまみくげのをく」もさおはふらり

と地のいよる 此他・基俊集・夫木抄家のあもつげれをく」とよみする

あり又建長八年 今より百六十六 百首哥合 後九条 内臣 「あみ事れつげのさく櫛さ

もやはあごあらまみくげのさく」賤の女らぐはけのさくをむり」とよま

さうたる事かくの如く又大内此宮女も本様はしるす清少納言が

枕のまじり季吟本の一はたけ七日ふ月ゆきまのりつるあをやりみみ出

中車暑く見まじり御門ゆきまのりつるあをやりみみ入時

かいらともゆきまのりつるあをやりみみ用意せねををれ

さどーり笑らふもまじり具かある宮女三四人も乗たるん物見車を

清門のまは相へのりかけがうと引ゆかたるものふ女中顔を

ありけたる櫛のちりも心げをゆきまのりつるあをやりみみ笑

けきと車内なれば笑ひ顔ゆきまのりつるあをやりみみ一具あり

ををあんとていふ文句はく宮女も本様さたるをあるべし又宣家

と同時ある明月記信實朝臣が作の今物語五節の冬の夜舞姫木

櫛火のみたくまん燃ゆたる事とさうさて貴重の沈香の櫛

もゆきまのり榮花のまふあらか絲の箱れふかみをいまじりんらんらんら

白か糸のかう并ぐをいまじりとあり沈の櫛といふ事○さて又古言みまとりの

何れもあまの物を美称辞あり万葉四乙女子が玉をげる玉の

いふ今も妹あまをさざれば又玉の飾を乃玉ともり夫木抄

櫛の心をばあまをさざれば又玉の飾を乃玉ともり夫木抄

政子清前の櫛の形状此のふらく似たり今の櫛のさうはなり



此書乃...
 卷之...
 第...
 一...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...

18-12-11
 18-12-11
 18-12-11

